

クラウド共有による他者参照を生かした授業研究の推進

ーM-GTA 分析による概念生成を通してー

学籍番号 239108

氏 名 岡田 憲典

主指導教員 佐々木 靖

副指導教員 森田 英嗣

1. はじめに

平成 29 年告示版「学習指導要領解説総則編」，「GIGA スクール構想」，および「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」の各施策において，授業における ICT 活用やクラウドの活用がどのように求められているかについて整理した。これらの教育施策への理解を踏まえ，授業におけるクラウド共有の活用の有用性に関する先行研究と，教職員の ICT 活用を推進するための研修づくりに関する先行研究をそれぞれレビューした。

前者については，福島（2015），佐藤ら（2021），泰山ら（2021）の先行研究を紹介し，それぞれの研究において示されている，クラウド共有を取り入れることや他者参照を生かすことが児童の学習成果の向上にどのように寄与しているかについての知見を整理した。

後者については，木原ら（2014），櫻井ら（2011），草本ら（2024）の先行研究を取り上げ，「ICT 活用に対する熱意がどのように高まるかの要因」や「教員の 1 人 1 台端末活用の促進に影響を与える要因」など，既に明らかになっている知見を学校現場と照らして整理した。

2. 研究の対象

実習校の課題を明確にするため，文部科学省（2019）の「教員の ICT 活用指導力チェックリスト」のうち「B：授業に ICT を活用して指導する能力」と「C：児童生徒の ICT 活用を指導する能力」を参考にアンケートを作成し実施した。

アンケート調査の結果を管理職や主幹教諭と分析し，特に児童の共同編集活動に苦手意識を持つ教員が過半数を超えている点を課題として明らかにし，クラウド共有や他者参照をキーワードに据えて実践課題研究のテーマを設定した。

3. 研究の概要

木下（2003）が提唱する M-GTA 分析の手続きに基づき，本実践課題研究で授業者のクラウド共有による他者参照を生かした促進要因を明らかにするためのプロセスを述べた。

授業の検討や記録，その省察の方法については，鈴木（2015）の「ニーズ分析」や秋田（2020）の「教育実践の振り返りと教員間の議論のための 4 つの作法」を参考に進めたことを述べた。このほか，校内研究テーマとの関連性や研修委員会との連携についても触れた。

4. 基本学校実習における授業研究の事例とその省察

第3章の手続きに基づき令和5年度に実施した授業実践を示した。第1学年 道徳「友情・信頼（二わのことり）」、第3学年 国語「三年とうげ」、第5学年 算数「単位量当たりの大きさ」の各単元での実践の様子とその省察について述べた。

5. 発展課題実習における授業研究の事例とその省察

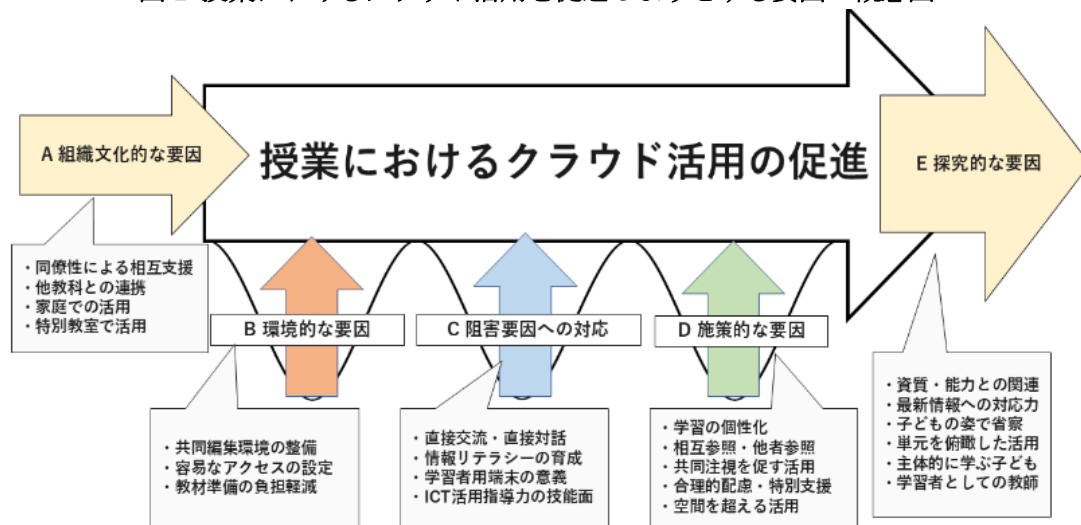
第4章で実践した学年を経年で追うようにして授業研究の事例を創出した。令和6年度の第2学年 生活「町探検の様子を報告しよう」、第4学年 総合「災害から身を守ろう」、第6学年 国語「デジタル機器と私たち」の各単元における実践事例とその省察について述べた。

6. 概念生成の結果

授業後のインタビューで得られた逐語録をもとにM-GTA分析を行った結果、クラウド活用の促進要因として、「組織文化的な要因」「環境的な要因」「阻害要因への対応」「施策的な要因」「探究的な要因」の5つのカテゴリと22の促進要因を導出した。

木原ら(2014)や草本ら(2024)の先行研究と比較した上で、インタビューで得られた逐語データの関係性を明らかにし、図1の通り概念図を生成した。

図1 授業におけるクラウド活用を促進しようとする要因の概念図



7. 効果検証と今後に向けて

図1で示した概念図の効果検証を実施するために取り組んだ、質的・量的検証について述べ、そこから考えられる成果と課題を整理した。

質的検証では、4名の教員へのインタビュー調査を実施し、生成した概念図との相関を検討した。量的検証では、令和5年10月と令和6年10月に実施した質問紙調査の結果を比較し、対応のないt検定を実施した。その結果、有意水準5%以下のp値を示した。図1で示した促進要因に基づいたアクションリサーチに一定の成果があることが示唆された。

一方で、一部の項目で標準偏差の広がり確認されるなどの課題も明らかになった。